亦携山門疏草案來一見之、
廿七日、天快晴、齋罷謁東府、來月十六日相國寺入院日執供台覽、有御成者可
爲寺家大幸、不可有御成之由被仰出、（○本書、八月、九月、十月ノ記事ヲ闕ク、）
十一月六日、不參、天快晴、（○中略）（等瑤）瑤子英桃源和尚住相國方外交疏草案持來、一
見奉還之、希世人才、可嘉尚也、

等瑤方外交疏ヲ作ル

〔蔗軒日錄〕人　七月廿日、晴、（○中略）桃源和尚書到、使者玄菊云者曰、八月中桃
源可住相國云々、

〔實隆公記〕十　八月十六日、（戊子、）晴、（○中略）今日桃源和尚相國寺入院云々、天隱
和尚入來、
十八日、（庚寅、）晴、（○中略）桃源和尚入來、

〔半陶文集〕一　桃源住相國山門

萬年山相國承天禪寺山門欽奉大檀越鈞命、敦請前席等持桃源禪師、住持本
寺爲國開堂演法、祝延天子萬安者、右密昌、韓信著錦袍而升壇、當將軍拜賀之
日、裴休披毳衲而遊寺、逢佛法付囑之時、鞭笞龍象、其徒八千、圖畫麒麟、維功第
一、共惟、新命堂頭和尚大禪師、斗南人物、天下達尊、性學門戶理學淵源、胸涵萬

山門疏

古、銖視軒冕塵視金玉、眼眇諸方、搴詞林思涉風騷、坐講帷口談渠祿、麤室稱僧
中太史、合參寥覺範爲一人、玉泉呵向上宗師、有文殊普賢較些子、承天閣現萬
年烏鉢、選佛場攀八月蟾枝、鐘鼓日新、包笠雲集、與漢々王與楚々王、物論攸皈、
如堯々傳如舜々傳、皇圖式祝、皇圖謹疏、今月日疏、

知事比丘　頭首比丘
耆舊比丘　西堂比丘

桃源作

〔補庵京華新集〕崇壽謝語

才名四十年、見東坡天華無葉之制作、枯腸五千卷、聞北禪海棠有香之品評、馬
祖堂前恩超師資、鰲山店上義齊骨肉、昔信北山開堂爲同行、月窟拈一香、時論
高之、某猶拘俗情、不攀此例、莫愧於心乎、感戴、
文明丙午八月三日、吾友仙桃源、相國公帖出、同十六日入院開堂、桃源道學
兼全、眞本色住山也、予適居崇壽東菴、當晚小參謝詞如此、推奬過實、不敢所
當、而久要不忘平生之言者、獨有桃源哉、景三志、

瑞仙景三ニ謝ス

八月三日ニ公帖出ヅ

〔五山傳〕萬年山相國承天禪寺住持位次簿　第八十世、桃源和尚、諱瑞仙、嗣明遠（修哲）禪師、文
明十八年丙午八月九日、領公帖、同月十六日入寺、法齡五十七歲、

八十世

〔詩歌合〕文明十五年正月十三日

作者

左方○中略、全文八、文明十五年正月十三日、幕府褒貶詩歌合ノ條ニ收ム、

桃源○中略、文明十八季丙午八月十六日相國入寺、

○幕府等恩ヲ相國寺住持トナスコト、四月二十三日ノ條ニ、梵鐸ヲ同住持トナスコト、九月二十七日ノ條ニ見ユ、

十七日、己丑京都本能寺、西坊城長光ト同寺敷地ヲ爭ヒ、之ヲ幕府ニ訴フ、

是日、幕府、之ヲ裁シテ、本能寺ニ還付セシム、

〔本能寺文書〕一○京都

本能寺敷地六角以南、四條坊門以北、櫛笥以東、大宮以西、四町々除非人風呂敷地、事、西坊城(長光)家雜掌寄事於御拜賀之供奉、○義尙、右大將拜賀ノコト、七月二十九日ノ條ニ收ム、申給奉書之處、捧數通之證文、被歎申之條、爲糺明可被出帶文書正文之趣、雖被相觸坊城家無音之上者、無其理之段勿論歟、所詮於所給雜掌之御下知者被召返訖、早任度々證文幷當知行之旨、寺家彌可被全領知之由、所被仰下也、仍執達如件、

文明十八年八月十七日　加賀守(假名清房)(花押)

幕府奉書非人風呂敷地

長光文書ヲ田帶セズ

敷地永代買得相傳ノ次第西坊城言長道的寄進ス

日隆本能寺建立ノ爲メ買得ス

義敎非人風呂替地ヲ本能寺ニ與フ

坊城俊秀押領ス

當寺住持

散位(清元定)(花押)

當寺敷地永代買得相傳之次第事

一右此地者、西坊城言長卿康曆元年十二月廿三日仁申請綸旨、添寄進狀、妙峯寺道的上人仁寄進、次因幡堂執行覺勝相傳之、東岩藏寺中明院江應永十四年賣渡之畢、次永享五年癸丑卯月二日、爲當寺建立、開基日隆聖人有買得、數通證文有之、買得檀那如意丸云々、寄進狀俊宣出之、

一普光(義敎)院殿樣被知召子細事、此地永享五年雖買得四丁町之內、未佛閣等不立、院坊依爲一兩之躰、艮角非人風呂被令立、其砌依奉恐權威、不能訴訟申、其後買得子細依達上聞、永享十年之冬、忝替地冷泉富小路仁下給、剩三箇年地子自定光坊被令寺納、其後文安年中、言長末孫雖及違亂、就小笠原信濃守(持長)上件申開間、敵競望停之、兩奉行松田(貞)津志摩(馬)守、齋藤上野守、奉書有之、其後寶德二年于時管領畠山殿沙彌德本、安堵御敎書被成畢、爰享德元年守職上表之刻、坊城少納言卿申掠上聞、家之領地之由申沙汰、迄至長祿四年雖押領、其後長祿四年

文明十八年八月十七日

本能寺幕府ニ訴フ

伊勢貞親裁許ス

殿中對決本能寺理運

長光康暦ノ綸旨ハ謀書ナリト支フ

文明十八年八月十七日

三月廿七日ニ請伊勢守貞親儀、以奉行齋藤四郎衛門種基、加判清和泉守貞秀、同年七月十六日ニ達上聞、則糺明、可就理運之由被仰出了、被付召文砌、自高倉御所被仰付、堀河御局御支趣甚、雖然爲貞親儀糺明之由被仰出上、召文不可闕如云々、乍去御支不聊爾、星霜延引及六ヶ年、其間之召文致(至)第四ヶ度、自敵支狀出之、其旨在別紙、當寺聽二問番在別紙、其時敵屈理間、伊勢備(貞親)前守吹嘘(櫛津之親)攝掃部頭方ニ、雖致種々計略、貞親被聞開、當寺理運故、不能許用云々、

一勅書子細事、彼坊城家就可致山口察(祭)役儀、自舊院樣以當傳奏廣橋(綱光)殿、坊城家可就理運之旨勅定有之、雖然可任糺明之理非之由、御下知有之、上意忝何事如之哉、

一於殿中對決事、寛正六年七月十七日(此方奉行齋藤四郎衛門、敵方奉行飯尾左衛門大輔)、敵證文明鏡被盡淵底訖、言長類判等達上覽、其旨御奉書被載之、同廿六日、自攝掃部頭被出書上了、仍自寛正六年迄至當年、無他妨致知行者也、

一康暦元年綸旨實不事、敵方謀書之由雖支申、一條殿御一行、中山(親雅)殿推紙幷證狀對論之時御披覽有之、被付理運上者不能是非、

長光事ヲ義尙ノ賀屋ノ拜ニ從ヒ寄セテ幕府ノ奉書ヲ掠ム

一言長類判事、公家判不可有之由雖支申、類判自壬生文庫被出、有御披覽無預儀旨、被成上意畢、

一古山(丹豐)名殿借書事、敵以此儀雖爲知行證文、自岩藏寺金吾返狀、岩藏寺文書內有之間、還成當寺證文畢、

一文明十八年七月五日、寄事於御拜賀供奉、當知行之由申掠、雖著御奉書、同十日、上件之理運依達上聞、同八月十七日、安堵御奉書頂載了、(奉行飯尾加賀守清房也、本阿被申)

近江多賀宗直、京極高清ニ抗ス、高清、同國三雲ニ遁ル、是日、高清ノ被官京都所司代多賀高忠、軍中ニ卒ス、

〔江北記〕一文明十八年八月十七日ハ、多賀大成欲生害ハ付候ヘ、其趣(聞カ)三雲ヘ御ぬ(ぬ)て被成御出候事、

一法(京極高數)正寺殿御幼少之時、滿願寺殿(京極持清)御代を免さ(ま)、普光(慶)院殿御時上意御能御座候て、當方御家督被成御心得候處、普光院御生害候、其時滿願寺殿を被立御用御生害候、其以後隱岐(經氏)殿、多賀豐後守大(高忠)ゑん事兩人取持、い(ゑ)尻殿御家督之儀を上意へ訴訟候處ハ、美濃守壽保、法正寺殿六郎殿ハて十四年御座候哉取立申、他家人ハ御家督をさせ可被申候義、お(ゑ)かしき由申

文明十八年八月十七日

沙汰候て、無別義御家督もさせ申候、此時當方悉賀州のさへ成候、同朋已下迄法正寺殿御方申者廿人計あらてハ無之由よ候、六郎殿よそ御座候時也、

金吾騷動

一能仁寺殿（京極高詮）御舍弟五郎（秀綱）左衞門殿と申候、御家督を被望御取持候、是を金吾さうとうと申也、箕浦次郎右衞門事、金吾方を申、依其子細、箕浦庶子よ奉公仕成候、可被召出候根本ハ次郎右衞門尉、其次三郎左衞門、其次四郎左衞門とて三人兄弟也、然間次郎右衞門惣領筋也、三郎左衞門ハ備中と申、祖父俊翁時此方へ與力候て被申談候、彼孫子者大ゑん生害候時相果候也、四郎左衞門召出、箕浦ゝ被成候也、

高忠生害

〔春浦和尚金口說〕大源本公禪定門小歛忌香語

宗熙作高忠小歛忌香語

夙植德本、鑽之彌堅、一燧繚繞、薰徹大千、于茲文明十八年仲龜十七日、前豐州大守大源本公禪定門、於江州當敵卒鋒之際、金化了矣、孝子經家就洛之私第、供佛齋僧、預修小歛忌之儀、彫刻地藏薩埵尊像一軀、大乘妙典漸寫一部、水陸一會、拜請雲侶、諷演祕章之次、命山僧焚此香、以奉供養三世十方諸佛、諸祖諸大薩埵、果海賢聖、釋梵龍天等、現座道場過去正法明如來、所鳩善利、爲懿靈莊

子經家京都ノ私第ニ法會ヲ營ム

嚴覺場者也、共惟、某武林忠勇、國家英賢、專精騎射之藝、名喧四海、克運帷幄之籌、威振八埏、加之叩大用（宗顯）先師室、辨得眞正見解、繼龐溫居士躅、了却大事因緣、所以禪會教外、鑑在機先、豈謂運遭兵厄、遽爾戢化權、腦後拔箭則氣排佛祖、眉間掛劍則血洒梵天、剜心劈腹、度刃奔泉、畢竟落什麼處、滿城風雨近重九、菊吐黃金籬落邊、卽今本公禪定門、現大人相、臨茲靈筵、諸人還相見麼、（以香點一點云、）築著鼻孔、突出面前、　于時文明十八年九月三日

宗熙小倉松牧齋ノ詩ニ和シテ高忠ノ死ヲ悼ム

大源居士高義薄雲、孤忠貫日、兵術之奇、射騎之妙、蠻奴海堅、咸以知之、去歲於江州俄爾羅金化之厄、緊擧世惜之、豈不慟耶、於茲小倉松牧齋哀詩有之、句々金聲、字々玉振焉、法社尊宿佳衲、闘和如雲、吁大源於野縮久爲外護之金湯也、是故因雅便、遠見索和篇、今覩飜水之作、而不覺老淚落紙也、余耄矣不遑思索、兎禿而黑澀、勉以奉依前韻、恐招傍觀之哂者乎、

法名宗本宗顯ニ參ズ

忠功射藝播窮桑、北斗藏身甚諦當、截斷從前不平叟、湖山尖處劒鋒長、

〔龍寶山大德寺誌〕（乾坤寶山外志）　多賀豐後守高忠、法名宗本、號大源、嘗參養叟（宗顯）和尚、而有所得、叟以龐緇陳曹待之、（注語見其像讚、今存龍泉庵、）文明十八年八月十七日卒、其子某、法名雲翁悅公、孫某、法名功叔忠公、相次檀護龍泉菴、

佐々木ノ弟多賀ヲ領スルニ依リ姓ト爲ス

大宰少典勝良ノ裔

〔龍寶山志〕二寮舍幷子菴松源院寮舍　龍泉庵　陽峰和尚嗣春浦、永正九年七月廿六日化、八十三、明應年中建、多賀豐後守高忠子孫世爲檀越、至日新和尚時、源家康公女正清院泰譽興安大師再營之、在本山北、

高忠　文明十八年八月十七日卒、號大源宗本、其子某法名雲翁悅公、孫某法名功叔忠公、相次爲龍泉檀越、

〔寛永諸家系圖傳〕百六十五中原姓　多賀　多賀本姓中原なり、中世佐々木弟豐後守高忠江州多賀を領せ、故り多賀豐後守と稱す、その子孫多賀と稱せ、

〔寛政重修諸家譜〕六百七十六中原氏　多賀　寛永系圖りいたく、本姓を中原なり、中世佐々木の弟豐後守高忠、近江國多賀を領せしより稱號とせ、今此呈譜に、太宰少典勝良の末孫、多賀孫三郎秀貞より七代豐後守高忠代々近江國り住せ、常則を其七代乃孫なりといふ、案せるに、寛永系圖高忠をもりて佐々木の弟といふりよりは、宇多源氏なるべきを、中原氏といふものうさろふへしといへとも、高忠佐々木乃氏族にしあ、中原氏此家を繼しものろ、いまさきを詳にせす、

〔多賀系圖〕多賀豐後守高忠初名幷行年相知不申候、　將軍義政公之時、京極近江守持清ヲ京司トス、依爲高家、應仁年中之亂、持清自身不指向、一族多賀豐後守高

高忠ノ替紋

將軍家ヨリ拜領ノ紋初メ出雲守ト稱ス

父ハ高長美人艸ヲ著ス

忠ヲ名代ニ遣候、是所司代之初之由、其砌禁裡御用モ就被仰付、賜中原姓候旨、伊勢守貞親ニ加リ、犬追物之奉行等相勤候由傳承仕候、長享元年八月十七日卒去仕候、妻由緒傳來不仕候、

〔多賀家中原之考〕多賀家中原氏之考幷諸說集書

當家ハ中原氏、朝臣尸姓多賀、本國近江、定紋今時、釼廻七酸漿也、

當家舊記ニ、古代一酸漿本紋也、既ニ諸家紋盡ト云フ古記ニ多賀ノ紋一酸漿ヲ出セリ、又家說ニ、多賀豐後守高忠喰合鶴菱ヲ替紋トシタマヒシト云ヘリ、此外丸ニ三酸漿ノ紋近代用之、又二引兩ノ紋用之、家說ニ、是ハ豐後守高忠將軍家ヨリ拜領ノ紋ト云ヘリ、○中略

一多賀豐後守中原高忠始出雲守云ケルヨシ、ハ右所謂多賀孫三郎秀貞六代ノ孫ニテ戰功(ヰカ)モ等(モカ)ヲ有ル人也、就中高忠之父豐後守高長以來小笠原家ノ門人ニテ、別ニ弓馬ノ故實ニ委敷シテ世ニ其名高シ、高忠著述ノ美人艸ト云書モ于世殘リアリ、高忠ハ京將軍義政公、義尙公ノ時犬追物張行アリケル時、高忠犬追物檢見ノ役勤玉ヒ義政公、義尙公ニ昵近アリテ勤功多ク、ケル夏、古傳書ニ分明也、

文明十八年八月十七日

京極高員ノ子多賀高長ノ養子トナル

一義政將軍ノ時、京極中務大輔持清京都諸司(所司代)ヲ勤ラルヽトキ、持清ハ在所江刄ニ居ナカラ、一族多賀豐後守高忠ヲ京都江出シ置、諸司代役ヲ勤メサセラルト也、是寛正中ノ事ト云ヘリ、京都諸司代役ノ始リハ、則豐後守高忠也ト、于今賞翫スル所也、

一家說ニ、多賀豐後守高忠實ハ京極加賀守高員カ男ナリケレモ、多賀豐後守高長ノ養子ト成玉フ故、中原氏多賀ノ稱名ヲ用ケル也、夫故ニ子孫今ニカヘ紋ト號シテ、四ツ目結五三ノ桐ヲ用ル歟此故也ト云ヘリ、

一多賀豐後守高忠ノ高名京將軍家譜及諸之記錄ニ見ユ、其名朝鮮國マテ聞達アリタル事、松下見林カ著述アル異稱日本傳ニモ見ヘタリ、當家ハ初祖多賀孫三郎以來佐々木京極家江從屬シテ、京將軍家江奉仕セシ事ナレモ、多賀高長、同高忠別テ京將軍家江出仕アリト聞ユ、中ニモ高忠ヨリ、分テ京將軍家昵近アリシト見ヘタリ、

〔蔭涼軒日錄〕文正元年閏二月十四日、天風雨、〇中略所司(忠)代午浴之次來話、以犬追物祕書數卷使益齋讀之、問甚麼書、則答曰等持(足利尊氏)院殿御代被禁犬追物、蓋殺生之意也、然小笠原信濃守貞宗以爲武藝之其道之故捧目安、與其武道之文章也、辭尤妙也、其中曰、步射以此二字、讀カチタチト也、尤祕事也、十以此一字讀ツヽト也、如此之類皆曰祕事也、所司代傳受小笠原方祕事底之一流也、彼小笠原方有犬追物中興御判也、武家名望之事也、所司代閑話之次、聊一盞酒、忽一器而已矣、成知客醉餘、半狂而來也、所司代依雨不得歸、於楨書記自牧宿所暫滯留、

高忠犬追物小笠原家祕事ヲ傳受ス

十九日、天陰、想爲花乎、早浴、阿彌陀堂花尤盛、如雪也、所司代、東坊、浦上慶阿、成知客來、〇中略東面阿彌陀堂前花又盛、但以之爲話柄、招之相逢、談笑爲快、其興有餘、但東坊依益齋翁勸和漢聯句、擊節應諾、卽曰有花林亦可、所司代多賀豐後守以和著之曰、

和漢聯句

霞ノウチノ松ソイロソフ　高忠

高忠ノ句

其餘或和、各言懷、吟事刻移、此浴中皆諸老相看、就于阿彌陀堂評詩、今日又與俗漢會合、和漢聯句遣興、凡此方浴者、緇白往來、不可勝數、偶有此趣又難哉、恐桃李嗔有風流罪乎、其宴遊興不闌、遊戲自在、或脫其服、或以太刀、與彼與此互如酬答、其和睦施恩惠、殆有仁有義、爲古今絕唱也、其中間所司代曰、以一物可付與于愚老、此座中各可推察當之、若相當則以十緡價直之珍物、可賞與云、仍

高忠集箴ニ鍮鉐盆ヲ贈ルヲ約ス

滿座拍手諾之、各言其志、卽益齋翁執筆、記其所謂、件々記軍(事カ)讀之唱之、爲不當、滿座皆笑、仍所司代說其物是鍮鉐盆也、上京而必曰與之、豈不爲珍乎、不亦幸哉、依其言不當、而不領十緡之珍、滿座爲恨、尤千載話柄、不亦奇哉、

和尙繪野菜等ヲモ贈ル

廿九日、雨降、○略中所司代多賀豐後守於湯山所約和尙繪一對、大根、卽菴、日飲野采、客一味、鍮鉐盆、金絲所惠也、

高忠所持ノ白鑞冷壺

明應二年五月三日、天降雨、○略中白鑞冷壺修復而彦三郎持之來、勸以赤雲、○略中冷壺代參百疋云云、予云、此冷壺者多賀豐後守所持物也、曾雲澤東堂江進之、予傳之也云云、

宗頤高忠ノ畫像ニ贊ス

〔多賀高忠畫像〕○山城芳春院所藏

贊

朝臣金吾都官大理大源宗本居士、忠孝兼全、廉潔愈勵、惟公無私、胷霧披而寬仁、赦刑還家、陰雲變爲晴霽、威望毅然、才逸俊乂、授任所憑、願言則嚬、何故掃除ヶ俗塵、盍復致眞諦、參万法話、則壓倒龐蘊老人、畫一圓相、則依倚陳操故制、正與麽時以何爲驗、竹篦乖觸、讋三尺龍泉光亘天、萬人叢裡施生計、

享德改元壬申九月日　　養叟老拙宗頤書 印 印

〔多賀高忠畫像〕○山城卽藏宗院所藏

經家ノ請ニ依リ宗熙高忠ノ畫像ニ贊ス

贊

射藝名高天下知、忠心義氣滿霜髭、人言日域由基出、嚙鏃機鋒猶是遲、

多賀前豐州太守大源本公禪定門肖像、令子經家就于老緇、索贊辭、書以應其請云、

長享首元仲秋日　　春浦叟宗熙

畫像ニ就キ多賀常政ト伊勢貞丈トノ問答

〔多賀高忠畫像問答〕

問　多賀三大夫中原常政

答　伊勢平藏平貞丈

一問、高忠畫像ハ烏帽子ハ懸緒無之事如何、

答、懸緒ゐるへき事ニ候得とも、古畫ハ懸緒なきも有之候、古ゐけ緒なくてゑほしゐふるをハ、打ゐけ烏帽子と申て、人ハ對そるハ無禮乃事ハ申候、畫像ハ子孫ハ傳へ、又ハ菩提所ハ置候物ハ候へと、打ゐけ烏帽子の躰ハてもくるしからす候半歟、

烏帽子ノ懸緒

打懸烏帽子

一問、此像のゑほしハ、全く京極折ゑ候半哉、

答、京極折ハ京極家の折樣ニ而候、高忠ハ京極家の內衆ハて候間、主人の家の折樣をハ憚て用ひ申さはましく候間、そゝの古き折形を用ひ

烏帽子ハ京極折

らるへきとふそ候へとも、主人より拜領候ハヽ、京極折をも用ひらるへき事ゝ候歟、畫像ハ京極折のゑうふ見えて候、

一問、著用の服、今時乃大紋ゝて候哉、直垂ゝて候や、

答、大紋ふてハ無之候、室町殿の時代、武家ニ用候うら打の直垂と見え候、うら打の直垂ハきくとちを、むなひもゝ、革ひもゝて候、ふの畫像のむなひもハ、組緒のやうゝ見え候、されとさゝらすら候、くミ緒ふてハ畫のあやまりこ候半歟、

服ハ直垂

革紐

一問、右の後の方ゝむさの形のとく白く色とり候物有之、是ハ何ふて候や、

答、是ハ袴のあひ引の間ゝり、白大口のむり出て見ゆる躰ゝて候、古ハ單直垂ゝてをうら打ふても、下ゝ白大口をむきて、其上ゝ袴を著候事、常乃式ゝて候き、

袴白大口

一問、袖の内の白きハ如何、

答、是ハ大ゝさひらゝて候、大ゝさひらと申ハ、白布の白き直垂ゝ、のりふむく付て、直垂の下ゝ著し候、是ハ衣文の爲ふて候、時ふより上ゝ著し候事も有之、束帶の時の大ゝさひらとハちゝひ候、されとも用る意ハ同し事ゝ候、古ハ直垂きる程なれむ、必下ゝ大ゝさひらをかさをも候、大ゝさひらをかさをもして、をゝ直垂むかり著候を、すひさゝれと申を、略儀ふいさし候き、

大惟子

素直垂

一問、ひさゝれゝて候ハヽ、袖口の下ゝ露あるへく候ニ、露無之事ハいかゝ、

答、是ハ露を畫落しさるゝて候半歟、必露有へく候、

袖口ノ下ノ露

一問、今世乃風儀を以て見候へむ、大紋ふても直垂ふても、必風折ゑネし著すへき事ゝ候、然るふ京極折を著する事不審ふ候、京極折を今時の觀世折も、共ふ俗ふ云侍ゑネしと云物ゝて、素袍の時ふゝそ用る物ゝて候なれ、直垂ゝ侍ゑネし著しさるハ如何、

裏打ノ直垂ニ侍烏帽子

答、今世ゑ風儀を以て見候へむ、不審なる樣ふ候得とも、室町殿の時代ゝハ、直垂ゝても侍烏帽子著用し候、又風折をも著し候、引立ゑネしなとをも著し候、時ふをり事ふより、其定めりゝりて著用定まらを候、されむ畫像ゝうら打の直垂ゝ侍ゑネし著せらをし躰、ひらとならす候、

引立烏帽子

一問、ひさゝをゝならハ、此畫像の服色ハ何色ゝて候ハんや、くろく見ゆる事いかゝ、

褐色ノ直垂

文明十八年八月十七日

答、ろち色と見え候、俗に云かちん色にて候歟、かちんのひさゝぎと申名目、古より有之候、

直垂ノ紋

一問、直垂に定紋付る事、今時には無之候、此畫像乃紋、全定紋を付さると見へ候、是はそめ紋にてはゐるまし、すり紋にて候や、此紋ひしろさにはゐれとも、何ひしといふ事さろに見へぎ候、何とやらん鶴ひしの様ふ見へ候、今時當家にて喰合鶴ひしをろへ紋とて用ひ候なれど、この畫像の紋を、鶴ひしにても候はんや、されとも分明に見えわろぎ候、如何、

摺紋
鶴菱

答、古は武家にては、直垂にも家の紋付候事を有之、或は金銀の箔紋、又はぬひめ付にもいさし候、ぬひめ付と申は、今世切付紋と申す物にて候、又ゑ墨にても繪の具にても書候事も有之、當世の如く染付にいさし候事は無之候、又家の紋にかきらぎ、何にても好きにまかろせ付候事も有之候、畫像の紋は鶴ひしにて有ゑく候、

縫目付

一問、ぬり弓に白ぎるろけさる事いろゝ、

答、是畫工のあやまり也、ぬり弓に白弦かくる事、射手方の故實ふ無之事也、惣而此畫工、弓矢の故實は不案内にて畫さると見え候、猶又左に見えさる事とを、皆不故實にて候、

塗弓

三所矢摺ノ藤

一問、弓に上下矢すりの藤無之候、いろゝ、

答、三所の藤有へく候、是又畫工の誤也、

一問、弼を藤にて卷さる様に見ゑ、いろゝ、

答、弼に藤まく事、故實無之候、右同斷、

一手神動

一問、矢は蟇目にても見へす、如何、

答、蟇目にては無之候、一手ぎんとう此形にて候、され共弓の大きさふ合ては、甚ぎんとう大キ過候、又一手ぎんとうは、黑くぬる物に候、是はかき色にて、木地ある様に見へ候、是又ゐやまりにて候、

矢ノはきめ

一問、矢のもきぎいろゝ、

答、本もき短く候、うらもきよりを長かるへき事にて候、是を前に申ス如く、不故實にて候、

葛卷

一問、矢にくつ卷無之事いろゝ、

答、ぎんとうにてをくつまきゐるへき事にて候、是を右同斷、

一問、ひきめなれは、目有之ゑき事ふ候、ぎんとう故、目無之ろ、如何、

弓ノ形

答、まんとうなるゆへ、目ハ無之候、前ふ申せし如く、まんとうましてハ大キ過候、是も右同斷、

一問、弓の形ハ如何、

答、弓のむりゝ不ハ古風まてよろしく候、

右ふ答申候裝束の事ハ、武家の故實まて候、公家方の故實とハ違ひ候事ふて候、又弓矢の事ハ、射手方の故實を以て答申候、畫像ま畫候弓矢ゑ、多賀高忠のまるし置き候書の趣とハ大ま違ひ候、畫工故實を知らすして畫候と見え候、

畫工故實ヲ知ラズ

常政奥書

安永六年丁酉正月廿四日　伊勢平藏貞丈錄

常政云、右此高忠大人の畫像當家傳來之儀ハ、別ま記をゆへまゑゝに不贅、かは畫像こ付不審の條々、此問答の趣まよりて甚さ分明を得さり、貞丈主は發見今ま初メさる事ゑゝら、感慨不少もの也、貞丈主の自筆は畫狀以て所藏の本として、予か子孫ま傳ふ、おもふま此畫弓矢の所ま至り、甚さ古雅之法式まゑゝひさるハ、いか成ゆへまや、糺明まさき事也、かは卽宗院まある元畫も如斯あやまてるゝ、又常房畫像を乞得て、畫工ま命せらきし時ま、

東福寺卽宗院ニ墓碑アリ

高忠ノ末裔常房畫像ヲ傳寫ス

常政等更ニ轉寫ス

かの畫工かきあやまてるゝ、何れまも譯あるへき也、此上ハかは元畫狀見て、その正誤狀頒ん事こそ本意ゑらめとおもふのみ、

于時安永六丁酉正月下旬　多賀中原常政誌焉、

是ゑゑれ吾先祖多賀豐後守中原朝臣高忠大人乃肖像にして、京都東福寺卽宗院こ藏る所乃をの也、又墓碑あり、大源本公と銘せり、夫豐州大人ハ佐々木京極家の股肱の臣也、主君寶性寺持清乃侍所別當たりし時、豐州大人は諸司代ま補せられき、弓馬の道を小笠原家より受傳へ、彼家は高弟さま、其藝術ま達し、其古實に熟せしゝハ、將軍常德院殿（義尚公）乃御所の犬追物り陪臣ゑれ共、撿見の役に召加へられき、道の面目、世の美談、古記り芳名を留め、今人又よく知る所也、去ゑ正德五年乙未、嫡裔常房公命を奉し上洛は時、公務のいとゑゑ、卽宗院ま詣し、墓碑及肖像を拜し、彼院主ま乞ひ、肖像を傳寫きられき、ゑゝく多常房よま高祖高當相傳へ、尊崇神祕して、常員、常政等同氏ゑりといへとも、いまさ曾而拜見をゆるされさりき、爰ま安永二年癸巳の二月、常員、常政等頻り高當ま乞奉りあ、始て拜見をる事を得り、其後常員、常政等是狀傳寫せん事を願ひ、懇望深切ゑるり感し、遂ま許容せらるゝ事を

得をゑ、ゑゝまおゐて、長谷川錦耕子重喬、ゑ□□して、是を傳寫せしめ畢、今此傳寫をる所毫末比違なく、一ゑ本の如し、是を永く常員、常政等ゝ子孫ゑ傳へゑ、祭祀を奉せゑめんを欲ほ、積年の大望一時ゑ達し、抃躍をるにあゐをゐり、因て聊禿筆を馳ゑ、謹て此來由を記をと云、

安永五年丙午十一月下旬　　多賀中原常員

多賀中原常政

伊勢平藏貞丈代筆○常政云

著述軍陣聞書

以下八、帝國圖書館所藏叢書料本ニ收ムル多賀高忠畫像問答ニ據リテ補フ、

小八木忠勝

就弓馬儀大概聞書

〔中原高忠軍陣聞書〕

（奥書）右連々相傳之分、悉委注置訖、於幡儀者、祕說不可過之、聊不可有外見者也、

寛正二年四月日　　小八木若狹守忠勝判

右此一帖、豐後守高忠連々注置、以證本令書寫者也、

永正八年六月日

〔就弓馬儀大概聞書（今稱高忠聞書）〕

（奥書）右此一卷者、小笠原備前守持長（法名淨元）、子息民部少輔殿（持清）、被任備前守、高忠運此道志尋申、其外佐々木加賀入道殿（高數）、法名道統、小笠原備前入道殿、相傳之聞書、幷古豐後守高長（法名宗圓）、自應永年中至興元（ヶ）、同子息持長相傳聞書、令相續之、致糺決令清書訖、於此道者最上之祕說、猶子孫有器用强者、可令相傳者也、

寛正五季十一月日　　豐後守高忠

右此一卷者、從遊佐加賀守方、於江州尋出之由被申、加一見之間寫留者也、但筆者之誤多候哉、雖然不及直、如其也、

明應二季八月日　　（上原）賢家判

小笠原持長等ノ傳書

上原賢家

此一冊、多賀豐後守高忠聞書也、然父賢家雖寫置、御懇望之條、以判形祕本寫進之候、聊不可外見者也、

永正十七年二月二日　　上原豐前守高家判

同高家

〔軍陣之聞書（文明七乙未）〕

軍陣之聞書

（奥書）右此一卷者、從小笠原備前入道宗信、同持長、相傳多賀豐後守高忠、上原豐前守高家相續口授之書也、外見可被禁世蹟（邇）者也、

寛文十二壬子　　中川昌可在判

高忠高家ニ傳フ

〔多賀文書〕一○武藏　小笠懸之事

小笠懸之事

文明十八年八月十七日

（奥書）寛正五年二月十四日、依大屋形（京極持清）貴命、家傳□□（大概カ）記之、

多賀豐後守高忠

（花押）

古來稀年父少將義胤朝臣、古書あまさ納をける文庫乃中に、當家の末葉ま
さしく書ける物あり、思ふ我ならん後、子孫ミさりにおさん事をおけ
き、をの經存命此中に、その所緣尋て、その家此家珍とおぼをの也、

佐々貴二十七孫管領

源朝臣氏胤（朱印）

弓之方

類聚流鏑馬次第
三ツ物五ツ物傳書

〔弓之方〕（奥書）多賀豐後守高忠　○内閣文庫所藏

右一卷者、雖爲斟酌、達而御懇望之間寫進之候者也、聊以他見有間敷候也、

寛正五年　十一月日　多賀豐後守在判

〔類聚流鏑馬次第〕○内閣文庫所藏

（奥書）右流鏑馬之事者、弓馬三ヲさこても就中祕そる子細也、惣而三ッ物五ッも
のハ、嫡流乃外こハかりそめふも不泄口外、是我家のかさね作法なり、如此
こ誌置事憚ありといへとも、予非其器、却失念之儀爲ならんと、師傳之口決
を加入して、一冊こ殘して、後昆ようさふ者也、能々思り志て、聊爲莫免外覽
而已、

文明五年十一月　從五位下中原豐後守高忠（本名多賀）（花押）

〔前田家藏書閲覽筆記〕六

高忠馬書　一冊

右此一卷、雖爲異祕說、難去依御所望注進候、努々不可有外見者也、

高忠在判

文明拾參年九月日　小米若狹守

忠勝（花押）

馬書

永正拾貳年霜月三日書之畢、　乘馬書ナリ、

射手撿見次第

矢代

〔射手撿見次第〕（奥書）

如此矢代小間子細連々口傳申、猶以文安五年六月十一日、小笠原備前守（持長）殿
ヨ懇ヨ尋申者也、同六月十九日、民部少輔（小笠原持清）殿へ如此口傳申之由申候處、矢代
射手撿見次第此外ハ有へからさる由被仰訖、聊不可有外見者也、

文明十四年九月三日　豐後守高忠

右此一卷者、多賀豐後守高忠加判形、元右仁相傳之一卷也、然間以御自筆被寫召之、任尊意校正之、令加判畢、　左兵衛尉元右（藤カ）

八廻之日記　矢沙汰次第傳書

〔八廻之日記〕（奥書）右八廻日記事、雖有皆人所持、懇口傳之儀無之、仍於此一卷者、矢沙汰次第、數年相傳分、爲子孫具注之、當流祕說不可過之、聊不可有外見者也、

文明十六年三月日　豐後守高忠（判在之）

安富元家　安富筑後守元家（判在之）

栗屋國家　右此日記、多賀豐後守高忠書寫本也、正文令披見畢、無比類本也、安富筑州元家、依爲數寄相傳所也、次栗屋孫三郎國家就懇望傳受云々、相構々可被祕也、

伊勢守貞宗（伊勢）（判）

右の御本、寸のいとまをゑハ、一ケ條もろきぬきてやとの御うさろひあるこよつて、明應九五月一日みのひとつより、むまの一よいさるうちころきうつしゐてまつるところ也、定落字あるへくハ、校合專一候、以賢慮御推察あるへく候歟、

遠笠懸　伊勢貞宗ニ傳授ス　犬追物　犬追物付紙日記　高忠書狀

〔遠笠懸〕（奥書）一書百五十一歟、　（内閣文庫所藏）

多豐高忠ヨリ相傳、

明應七年二月十二日　貞宗（伊勢）（花押）

備中守殿

〔犬追物〕（内閣文庫所藏）

（内題）「佐々貴御代々犬追物」

（端）「唯授一人之法」

〔犬追物付紙日記〕（端書）多賀豐後守高忠筆記

〔中川四郎氏所藏文書〕一　多賀豐後守高忠定

又京都時宜、旁々巨細自堀部方定而可被申候、取亂候間一筆令啓候、猶々雖御大儀候、御上洛可然候、御延引候てハ不可然存候、

去月四日御注進狀、今月五日到來、委細令披見候了、

一於神在城御合戰被致御忠節候由承候、同尼子刑部少輔殿御副狀令拜見

候、御同名御被官數十人被打死候、御粉骨至候、御屋形様御幼少事候間、御代官御定候者、即致披露御感狀申出、後便時可進之候、

一今度江州時宜、如仰言語道斷次第候、雖然上意嚴重被仰出候間、近日進發可仕候、定孫童子殿様如御本意可得勝利候哉、

一其様御暇事、如承候日數之儀、堅御申定事候、御參洛御延引不可然候、但今度事者、於國一段被致御忠節候間、不苦存候哉、歳明候者、早々御上洛可然候、次被上候荷物備前於仁田庄相違之由、宮藏人被申候間、浦上美作守(村宗)狀申候て進之候、同自私方明石方へ遣狀候、荷物返進候哉、諸事期後信候、恐々謹言、

拾月十日　高忠(花押)

赤穴四郎左衞門尉殿　御返報

○高忠、所司代ト爲ルコト、寛正三年九月三日ノ條ニ、幕府ノ命ヲ受ケ、近畿ノ土寇ヲ鎮スルコト、同月十一日ノ條ニ、等持院領柏井莊ノ丹波石見父子ヲ捕フルコト、同四年三月十三日ノ條ニ、相國寺所管御靈社東西散所ノ民ヲ役スルヲ、幕府ヨリ禁ゼラルヽコト、同年七月十三日ノ條ニ、幕府ヨリ山城德政一揆鎮定ノ功ヲ賞セラルヽコト、同六年十一月十一日ノ條ニ、京極持清、義政ヲ其第ニ迎フル費ニ窮セルニ依リ、高忠私財ヲ以テ之ニ充ツルコト、同年六月七日ノ條ニ、僧壽陽ヲ捕フルコト、同月十九日ノ條ニ、延曆寺僧徒ノ持清第ヲ襲ハントスルヤ、高忠出奔スルコト、同年十二月十二日ノ條ニ、幕府其第ヲ收メ、同第火クルコト、同月十六日ノ條ニ、六角高賴ヲ觀音寺城ニ攻ムルコト、文明元年五月是月ノ條ニ、今井高遠ト近江押立城ヲ攻ムルコト、同年七月二十五日ノ條ニ、近江簗瀨及ビ觀音寺城ヲ陷ルヽコト、同年八月四日ノ條ニ、持清ヨリ近江島郷ノ年貢諸公事等ヲ免除セラルヽコト、同月二十四日ノ條ニ、武田國信ト共ニ如意嶽ニ陣スルコト、二年六月三日ノ條ニ、其族多賀出雲守ト隙アリテ伊勢ニ走ルコト、同年九月二十一日ノ條ニ、義政ニ召サルヽコト、同年十二月二十日ノ條ニ、齋藤妙椿ト如意嶽ニ戰ヒテ敗ルヽコト、三年三月二十一日ノ條ニ、使ヲ朝鮮ニ遣スコト、同年是歳ノ條ニ、青蓮院領近江坂田莊、平方莊等ヲ安堵セシムル

コト、四年七月二十五日ノ條ニ、妙椿ト戰ヒテ、越前ニ走ルコト、同年九月九日ノ條ニ、土岐成賴、六角高賴等ト戰ヒテ敗走スルコト、七年十月二十八日ノ條ニ、其所領四條高倉及ビ綾小路間ノ地ヲ、鈴木忠親ノ違亂スルヲ幕府ニ訴フルコト、十年六月六日ノ條ニ、幕府ノ命ニ依リ、同族宗直ト和スルコト、十一年八月十一日ノ條ニ、高賴ト近江ニ戰フコト、同年閏九月十日ノ條ニ、幕府、宗直ト多賀與一ヲ和セシメ、高忠ヲ近江ニ入部セシムルコト、十三年三月二十九日ノ條ニ、高忠、伊勢貞宗第犬追物ニ參加スルコト、十五年三月十七日ノ條ニ、所司代トナルコト、十七年四月十五日ノ條ニ、京都七口ニ新關ヲ設ケ、細川政元ニ毀タルヽコト、同年五月三日ノ條ニ、多賀與一、下坂注記ヲ襲ヒ、其第ヲ火クコト、本年四月二十八日ノ條ニ、京極高清、宗直ヲ討ツコト、同年十月二日ノ條ニ見ユ、

〔參考〕

〔花押彙纂〕タ之部　多賀高忠

花押

宗仙寺ヲ建ツ

〔山城名勝志〕五洛陽附錄　宗仙寺元在六條高倉、今遷六條坊門南高倉東、　曹洞始祖道元和尚開基、和尚遺誡華洛三箇寺一員也、多賀豐後守高忠建立也、高忠者、應仁年中京都所司云云、

高忠塔

〔雍州府志〕十愛宕郡墓門　多賀高忠塔　在五條橋通南宗仙寺、是多賀豐後守高忠也、應仁文明之際、京極持清補京師之所司、于時高忠爲所司代、掌雜務聞訴事、時人服善政稱德化、歸依曹洞宗、而建此寺、曾永平寺道元之遺誡而曹洞宗寺院所在京師者少矣、宗仙寺、慈眼寺、天寧寺等也、

時人高忠ノ善政ニ服ス

〔山州名跡志〕二十洛陽寺院　宗仙寺　在五條南高倉東、宗旨禪、曹洞、中略、○檀那豐

○竹生島文書（近江）
文明貳四月十二日安堵狀

坐像

後守高忠像、（坐像三尺餘、○中略）當寺開基天江和尚、檀那多賀豐後守高忠、天江始武州三田海禪寺ニ住セリ、高忠敬信ノ故ニ當寺ヲ及建立、招請シテ令爲開祖、高忠文祿四年十二月廿三日ニ卒ス、法名宗仙寺喜山洞悅、（○高忠ノ卒去年月、法號等全ク相違ス、）

高忠ノ判物

〔白石先生紳書〕（十）　多賀は中原氏也、高忠近江人、豐後守、從五位下、所司代、應仁文明の間の人、熊野本宮之和田氏家藏判物あり、

妻ニ談合ノ上所司代ヲ受ク

〔寒川入道筆記〕落書附誹諧之事、

一多賀豐後よ所司代仰付らゝ候時よ、女しやものよ談合仕り、御返事申上うといふさ、尤しや、この女しやものよ談合申すといふよ說々おほしといへとも、あゝ女公事取次なと究めてと思ひ、右此ことく申上さ事しや、この人上代よも末代よも有間敷公事の批判、なの〳〵そのろすを知らゝ、豐後記とて名譽の批判せられたことをまるし置さる書物、法花經ほとなる卷物五くるん、多賀此君ふ傳りこれ有る由承り及ひ候、拜見申度く願ひまてなり、抑この人ハ、後花園御治世の末、寬正年中の人なり、將軍ハ慈照院殿の御代の所司代なり、慈照院殿ハ普廣院殿の御子なり、

豐後記

〔無名氏雜考〕多賀豐後守高忠　多賀豐後守中原高忠ハ近江の人よして、

板倉勝重ノ逸話ハ誤傳ナリト ノ說

京極家の被官なる、京極家侍所の所司ゐるし時、高忠所司代ゐ補せられ、政事を參議し、其善政今ふいゐる、て人の知る所なる、世よ傳ふ、板倉伊賀守勝重もし如て所司代の命をうけし時、妻ふかゐりて後命をハうけゐゐもるゐし、といゐる、し事ハ、ゐれもよくまれる事なり、されともまれハひろ事ふて、まの高忠ろ事なる、慶長十六年寒河入道といゐる、し人の書ゐる雜記云、（○中略、寒河入道筆記ニ同ジ、）おもふよ高忠も勝重も、ともふ所司代よて美名ゐる人なれも、かくゐやまる傳へゐるなるゐし、

年々加級ノコト御不審アリ

十八日、庚寅、右近衛中將正四位下中院通世、上階ヲ望ム、聽サレズ、

〔十輪院內府記〕中　八月十六日、若州吉富保事談合戶部、又通世朝臣三位中將事談合申、傳奏可申傳云々、仍直向勘亞相許演說、可給奏狀云々、向今大路、

十七日、傳奏狀到來、

十八日、早旦三位中將所望事傳奏狀付戶部、可申入云々、

廿三日、三位中將所望事、勅答之趣申遣傳奏云々、年々加級事御不審云々、此事大臣家多以如此、不然之家爭申之條無謂事也、（正親町三條實統）朝臣四品年々之時雅（飛鳥井）

過分ノ由逆鱗アリ

通秀通世上階幹旋ヲ安禪寺觀心尼ニ請フ

俊申同日云々、與大臣孫與至大中納言家非可爭之謂、御免又如何、依此事通世同有御思案云々、爲之如何、

十九年正月六日、○中略通世朝臣上階事可有勅許、羽林敍留難計云々、爲之如何也、

十日、○中略及晩民部卿入來、三位中將事密談、申狀肝要過分之由逆鱗云々、迷惑之至也、纔卜、亂蓬蘭之義□如何、凡過分之由於番衆所有沙汰云々、不辨人々家昇進、未練之輩任口計也、

廿三日、向淨花院、歸路參安禪寺、三位中將事共申入之、

八月三日、通世參番、實香卿任三位中將云々、有遺恨而已、○轉法輪三條實香三位中將ニ任ゼラルヽコト、長享元年七月二十九日ノ條ニ見ユ、

○通世、從三位ニ敍セラルヽコト、延德二年正月二十一日ノ條ニ見ユ、

十九日、辛卯西大寺西室住持ヲシテ、末寺京都長福寺住持職ヲ定メシメラル、

〔宣秀五位藏人御教書案〕

一三條大宮長福寺事、任先例、爲本寺相定住持職、致寺家與行之沙汰、可被抽天下安全御祈禱之精誠者、依天氣執達如件、

（文明十八年）八月十九日　　兼俱卿執申仰旨民部卿□

左少辨宣秀

西大寺西室住持上人御房

法華經ヲ聽聞ス

禁裏附近ノ在家火カル

兼俱卿方ヘ御教書如本法上啓如件、謹上等事可爲如何候哉、爲內狀者恐惶謹々上啟、勿論事候、

勿論候此分又如何元々儀いろゝ候やらん、

二十一日、癸巳、義政京都妙蓮寺ニ詣ル、

〔長興宿禰記〕下　八月廿一日、丁巳、晴、今日東山殿准后、渡御五條坊門大宮法華堂、妙蓮寺、去十九日入時正、每日法華經讀誦□之間、御聽聞云々、於長老坊有一獻、女中衆被參之、入夜深更還御云々、

〔實隆公記〕十　八月廿一日、癸巳、晴、○中略後聞、今日東山殿渡御妙蓮寺云々、

二十四日、丙申、京都ニ德政一揆蜂起ス、幕府、細川政元等ヲシテ之ヲ擊タシム、尋デ、一揆、東寺ニ據リ、同寺金堂以下ノ堂舍ヲ火ク、

〔御湯殿上日記〕○京都御所東山御文庫記錄甲二十七所收　八月廿五日、○中略よに入てとくをいとゝ、下のろさまあろ事あり、この御所のふしぬろさのさいけをもやき

北野邊ニ火事アリ

むらひて、御きもつふしなり、
廿六日、こよひもよひより、かゑをつきはしめく、きさはしゝへんにあゝとあり、

禁裏添番ヲ幕府ニ仰付ケラル

廿七日、〇略中この御所のゝへむんの事、ふけへきはふ申さるゝ、とゝせゐいらるへきよし返事申さるゝ、

畠山政長及ビ富樫政親ノ部下添番ニ候ス

九月廿三日、〇略中つちいつき、ゝミへあゝるとてふつそうなり、
廿四日、〇略中およひそへむんまむさけ山、とゝしゝ物ゐいらるゝ、
廿五日、〇略中つちいつきむらハるゝとて、きいともおひさゝしくと波る、

〔十輪院内府記〕中

東寺鎮守八幡等焼失ス

八月廿四日、〇略中入夜土一揆蜂起、急撞鐘、揚時聲、
廿五日、無殊事、入夜之儀同前、所々放火、言語道斷事共也、
九月十三日、當巽方有火、東寺本堂、廻廊、南大門、鎮守八幡等一時之内成灰燼了、一朝大伽藍如此之條、誠佛法之破滅、王法之衰微、矢言語了、是拂土一揆蜂起、結句寄手致悪行云々、

寄手ノ悪行

〔後法興院政家記〕十一

八月廿五日、丁酉、晴、去曉南方有火事、五條邊云々、土一揆蜂起云々、入夜南方兩所有火事、土一揆起云々、

幕府諸大名ニ命ジテ一揆ヲ討タシム

廿八日、庚子、晴陰、晚景雨一滴洒、被仰付諸大名、拂土一揆云々、自去夜靜謐退散云々、

再ビ一揆蜂起ス

九月十日、壬子、晴陰、及晚雨下則止、〇略中亥刻南方有火事、
十一日、癸丑、晴、〇略中下邊物忿、土一揆蜂起云々、
十三日、乙卯、陰、自巳刻雨下、〇略中巳刻南方有火事、東寺本堂云々、土一揆楯籠東寺間、細河右京大夫（政元）依武命差遣群勢責戰間、土一揆令放火東寺云々、生取死人等有數多云々、

又蜂起ス

廿二日、甲子、晴、土一揆又蜂起云々、
廿五日、丁卯、晴、小風吹、自細河拂土一揆云々、
十月廿五日、丁酉、晴、土一揆又蜂起云々、下桂庄土一揆同意者有之者、堅可罪科之由、自武家奉書到來、可下知由令返答了、

幕府近衛政家ニ所領下桂荘ニ同意ノ者ヲ罪セシム

〔親長卿記〕十七

八月廿四日、晴、土一揆出張、實自片邊不蜂起、洛中悪黨等也、方々放火、
廿五日、晴、〇略中入夜土一揆出張同前、
廿六日、同前、

廿七日、晴、土一揆聊静謐、略○中土一揆静謐云々、
九月十日、晴、傳聞、土一揆出頭、籠東寺云々、
十三日、雨下、今日被拂土一揆、細川軍勢相向、仍聞其氣勢、放火寺中、仍自寺家追出、一揆少々打取云々、寺家焼上、大師已來佛在所忽成亡所、末代之躰不便々々、鎮守八幡同焼失云々、
十五日、雨下、土一揆首今日被懸河原云々、
廿二日、晴、土一揆又出張、自片土非出張、洛中之悪黨等張行云々、今度籠居清水寺云々、

一揆東寺ニ籠ル　寺中ニ放火ス　一揆ノ首ヲ鴨河原ニ晒ス　一揆清水寺ニ籠ル

〔實隆公記〕十　八月廿四日、丙申、晴、無事、入夜土一揆出頂（集中同ジ）下京有回祿事、
廿五日、丁酉、晴、略○中入夜土一揆出頂、下京兩所焼亡、烏丸面小家又焼失、頗驚耳目、前代未聞式也、不可説々々々、
廿六日、戊戌、晴、略○中土一揆出頂如昨夜、但無殊事、
廿七日、己亥、晴、終日無事、今夜土一揆静謐、有御成敗之儀歟、珍重□
九月十二日、甲寅、晴、略○中四條邊有回祿事、土一揆出頂歟、
十三日、乙卯、陰雨降、略○中抑土一揆爲令退治、細川被官人卒軍勢馳向云々、午後有火事、東寺云々、適相殘之古刹逢此災、可悲々々、一揆凶賊首等取之、各歸云々、

土御門烏丸火ク　四條邊火ク

廿二日、甲子、晴、略○中入夜土一揆又以蜂起、所々鳴鐘、揚時聲、出雲路有火事、
廿三日、乙丑、晴、略○中入夜又土一揆騒動、
廿五日、丁卯、晴、略○中今日土一揆衆細川手者追拂之云々、其勢頗希代之狀□、
十月廿五日、丁酉、晴、略○中抑土一揆又有出頂之聞之處、今夜伏見殿艮方五六十人有野伏之形勢、仍門役者等追拂、□世波不穩、歎入者也、

出雲路火ク　伏見宮附近ニ野伏五六十人アリ

〔長興宿禰記〕八月廿五日、丁酉、晴、今夜洛中物忿、下京在家入運雜物、土一揆蜂起、號德政、東寺邊集會、方々亂妨之間、令騒動、土御門烏丸在家少々焼亡、亂妨人所行云々、後聞、自室町殿被仰付細川京兆被官人等、可禁制之由、有沙汰之間、静謐云々、近年毎年當折節令蜂起、曲事也、
九月十一日、癸丑、晴、今夜東寺急鐘聞、土一揆等亦蜂起、下京物忿云々、
十三日、乙卯、晴、陰、時々雨下、今日午刻東寺（號教王護國寺）云々焼亡、近日爲洛中德政張行、土一揆悪黨等集彼寺下邊、土倉酒屋等亂妨之間、依訴申、自室町殿被仰付細川右京大夫以下、可拂退之由、御成敗之間、今日細川被官人等帶甲冑、洛中土

幕府細川政元ヲシテ鎮壓セシム　近時此時節毎年蜂起ス　土倉酒屋等ニ亂妨ス

政元ノ被官土倉ノ屋質ヲ率ヒテ東寺ヲ向ヒテ發ス

東寺千手堂等焼亡ノ風説

高野山奥院焼亡ノ風説

一揆三十三間堂ニ籠モル禁裏ニ閉セラレ流言アリ幕府ヲシテ警固禁裏ヲシム

一揆蜂起ノ風聞ニ依リ東寺評定

一揆退散ノ立願

文明十八年八月二十四日

倉質屋之輩等相率發向東寺、欲及合戰、仍籠居惡黨一揆放火、本堂、金堂以下、中

南大門、鎮守八幡宮等悉燒失、所燒殘大師御影堂、千手堂、御摩堂、大塔等相殘

（神躰奉取出、）（西院）（護）

訖、桓武天皇御宇延暦十五年、東寺造立、嵯峨天皇弘仁十四年、令給弘法大師

（延暦十五年以來至于當年六百九年歟、或延暦三年之由記之、）

給之由、皇代紀記置者也、草創以來未無炎上、今度燒失、天下周章歎存事也、花

園院御代文保年中、有勅約之儀、彼寺令滅亡者、朝家可滅之由被仰定、末代令

失者、以別之堂舍可被造立之由、各被染（宸）眞翰、有遺勅、亦御下文等、各寺家帶之

云々、嚴重異于他寺哉、馳向群勢惡黨等十餘人打殺取首、生捕兩三人召具歸

所云々、寺令燒事、併發向之輩過乎、後日有沙汰、同日高野奥院御堂燒亡由聞、

慥說猶可尋決者也、

廿二日、甲子、晴、〇中略今夜土一揆亦蜂起、世間物忿、惡黨等清水寺幷井三間御堂

等閉籠云々、參内裏可閉籠之由有雜說、仍被申室町殿、被仰付諸大名、入夜武

士參内警固云々、

廿五日、丁卯、晴、今日細川右京大夫群勢等數千人、安富、藥師寺、香川、物部等、發向清水寺幷七

條河原、三十三間御堂邊、號德政張行、洛中洛外惡黨等、彼兩所閉籠之間、爲退

治也、卽分散之間各歸宅、

〔東寺百合文書〕ワ廿一口方評定引付文明十八年丙午〇山城

同廿四日、内談、

呆覺　寶緣　覺永　融壽　俊忠　公遍

一土一揆可蜂起風聞アリ、如先々構可沙汰也云々、昨日早朝東山殿室町殿

細川江可注進也云々、仍三ケ所返事イカニモ伽藍無爲可致了簡分也、

同廿五日、内談、

權僧正　呆覺　寶緣　敎濟　覺永　融壽　俊忠

去夜寅時分自京中土一揆蜂起楯籠、

一立願（廿五日）西院千遍タラニ、不動堂洛叉、鎮守千卷讀經、退散已後可被果之也云

々、被果願畢、

一廿七日夜四時分退散、翌日早旦細川安富方江退散之由申、已欲追拂出之

處江注進之、則自餘傍輩ヱ遣人、可發向事相止了、早々注進寺家大慶也、率

大勢者定可有亂妨等歟、

一同時東山殿ヱ退散之由申、對馬守目出之由返事了、

同（九月）五日、内談、

寶緣　敎濟　覺永　融壽　俊忠　祐源　公遍

文明十八年八月二十四日

重ネテ蜂起ノ風聞ニ依リ幕府ニ注進ノ評定

土一揆重而可楯籠之由風聞間、寺家迷惑也、別而可被注進申之旨治定了、

同十日、

寶緣　敎濟　覺永　融壽　俊忠　慶清　嚴信　宗承　圓忠　祐源

杲明　榮舜　俊雄　公尋　俊我　公遍

一御影堂突鐘事、每度土一揆楯籠之時、可突之由申□之儀申之間、西院之外江可出渡之由、少々意見之間披露之處、追可有了簡云々、

同十八日、

寶緣　敎濟　覺永　融壽　俊忠　慶清　嚴信　宗承　圓忠　祐源

杲明　榮舜　俊雄　公尋　俊我　公遍

伽藍炎上

一當寺伽藍回祿事、

去十日重而土一揆楯籠于寺中之間、爲武家被仰付、以細河手令追却之處、

燒失ノ堂塔

金堂損火、所謂金堂、同廊、廻講堂、同廊、鐘樓、經藏、鎮守、同廊、廻中門、并廊、南大門、已上、七宇、一時炎上、凡草創延暦十五、以來六百九十二年、一暨于斯時滅亡、寔可謂時節到來、衆僧之愁歎、密徒之淩(陵)廢也、如祖師記文者、天下之衰弊、國土妖亂無疑也、見聞之緇素、敢無不驚悲者也、

鎮守八幡神體ヲ取出シ大塔ニ移ス

一鎮守八幡宮御神躰事、火炎已懸御殿之間、予公遍、打放御戸之處、覺永法印被走向之、奉出神躰、次執行榮增法印、馳參、彼等相共奉舁、奉出南大門、然後奉移塔婆畢、

炎上ノ子細ヲ義政ニ注進ス

一右之炎上之子細被調書狀、以宿老連判、東山殿へ可被注進申之由、對馬守意見之間、認書狀、可被申分治定畢、

諸門跡炎上ヲ見舞フ

一就炎上、諸門跡ヨリ御訪方々披露了、

一炎上之剋、治部卿律師賴俊、被馳參付之、翌日衆勘御免之事、以書狀被申通披露之處、只今事者、自他取亂之上者、追而可爲御沙汰之旨申了、

同日、

寶緣　敎濟　覺永　融壽　俊忠　慶清　嚴信　圓忠　祐源　杲明

榮舜　公尋　公遍

一西院突鐘事、世間物忿之間者、可下置之由、少々承之旨披露之處、明後日可被下分治定了、

一講堂御讀經事、於不動堂可被勤行也云々、

大工等大塔ノ火ヲ消止ム

一今度塔婆既欲炎上之處、大工登消火之間、可有御褒美、大工并太郎三郎各

百疋宛可被下之旨治定了、

同廿三日、

權僧正　杲覺　寶緣　教濟　覺永（退座、）　融壽　俊忠　慶清　嚴信

宗承　圓忠　祐源　杲明　榮舜　俊雄　公尋　俊我　公遍

一寺內乾角之堀、今度依爲無用心、西ノ外ノ竹原ヲ壞シ堀ニナシ、元ノ內ノ堀ヲ岸ニ可被成也云々、如此治定之處、可爲大義之間、元ノ內堀可廣堀之、（西ノ竹原ヲ壞リ堀トナスノ議）

中綱申條、可爲其分也云々、

一就重而土一揆蜂起可寺中亂妨之由、從所々告示之間、立願之條々、（重ネテ蜂起セントスルニ依リ又立願ス）

立願條々

一御影堂三ヶ日尊勝タラニ、不動堂一七ヶ日不斷護摩、八幡宮仁王經（三ヶ日、）

已上十月可被勤行之、

一同三ヶ所西院タラニ、八幡宮千卷讀經、（心經、）不動堂慈救呪一落叉、已上十一月、

右立願者、去十六日夜光物飛、諸人見之由、令占之處、寺中之口舌鬪諍火災病事、殊十月、十一月、明年正月、二月、甲乙日愼期也云々、（光物飛ブ賀茂在通鬪諍火災病事ノ由）

十月五日、

權僧正　杲覺　寶緣　教濟　覺永　融壽　俊忠　慶清　嚴信　宗承

圓忠　祐源　杲明　榮舜　俊雄　公尋　俊我

一立願不動堂不斷護摩事、（自九日至十五日、八十五座、番帳別ニアリ、）井口供僧參懃、但於護摩未傳受之輩者可被除之、（卿公秀濟、少納言公融椿、）於向後者、縱雖有施物等不可催之、先年（文明之初比、）護摩未傳受之仁被請之歟、未盡之子細也、凡如應永十五年不動堂百座護摩之者、於未灌頂印可等之族者除之、懃修供養法、同年重而護摩之時者、未入壇之輩者用手代云々、雖然今度之儀者、不及未灌頂等之沙汰、唯護摩未傳受之仁計可除由旨衆儀畢、（立願不斷護摩ヲ勘進ス）

一支具事一座別貳疋、初中後熟佛供餅菓子等、（五十文宛加增、）

一初中後戌時助衆皆參慈救呪、開中結供養法聲明無之、

一神供事、各戌時阿サリノ便宜之方ヱ差之、

同十一日、

救濟　覺永　融壽　俊忠　慶清　嚴信　宗承　祐源　杲明　榮舜

俊雄　公尋　俊我　公遍

一炎上事先度禁裏様へ注進被申處、追而以事書爲傳奏可申由、伯民部卿方被申、仍炎上事、勸進等事、被成官符之様可被申入分了、

炎上ヲ奏上　勸進ニ官符ヲ請ハントス

一講堂跡明日十二日、以坊中青侍以下可被掃除之、然者諸奉行預等罷出可致奉行分了、

講堂焼跡掃除

一伽藍建立事、以勸進可被沙汰之否評儀之處、今時分事者可被勸十方也、但以順之意見被定了、仍諸門跡へ御意見被尋申、勸進之儀無苦者可有沙汰云々、

勸進ニツキ評定

同十三日、科、

權僧正　呆覺　寶緣　敎濟　覺永　俊忠　慶清　嚴信護摩免　宗承　祐源　榮舜　俊雄　俊我

一禁裏様へ炎上注進事、一昏可注進申候、但官符等幷勸進已下事、先々不可被申候、其故ハ官符到來アラハ可有煩也、勸進事者不及奏聞共、往古西院有其例之上者、不可有何苦哉、御門跡へ不可及尋申云々、

官符到來セバ煩アリ　勸進ニ依リ勸進ノ事ハ奏聞ニ及バズ

十一月、科、

權僧正　呆覺　寶緣　敎濟　覺永　融壽　俊忠　慶清　嚴信　重禪　宗承　圓忠　祐源　呆明　榮舜　俊雄　公尋　俊我

一炎上之跡普請事、守天氣可致下知也、

一吉祥院南毎度寺家物忿之時馳參之間、被遣檯已下者可然之由、公文所等意見之旨披露之處、尤可然之間、桶三荷可然相副肴可遣分了、

同十二月十日、科、

權僧正　呆覺免　寶緣免　敎濟　覺永　俊忠　慶清　嚴信　宗承　圓忠　祐源　呆明　榮舜　俊雄　公尋　俊我　公遍

一十七日講堂佛像安持五大尊、般若井之脇士、寶法羯薩之四井、中尊炎上、梵天、帝尺、四天已上十六尊也、千手佛壇ノ西方江構佛壇、奉居之畢、

佛壇ヲ構ヘテ佛像ヲ安置ス

〔大乘院寺社雜事記〕百四　八月廿一日、

一京都德政沙汰、細川方所行歟、但藥師寺備後（元長）方不可然之由申、如今者不可有殊事歟、

政元德政令ヲ布カントシ藥師寺元長ノ停ヲ之ヲ

廿六日、

一專實一昨日上洛、今日下向了、京都德政以外也云々、五條西洞院一丁餘燒、水上藥師之前茶屋燒之、秋野道場邊ニ亂入、大方珍事也、七口可止云々、大

張本人物部某

略物部長(張)本之由及其沙汰了、

〔大乘院寺社雜事記〕百五　九月十四日、

一○中略京都馬借以外也、東寺ニ相籠責之間、東寺炎上、昨日日中より事也、五重大塔計相殘、南大門同燒失了、

馬借等東寺ニ籠ル

十八日、

一加賀相語、東寺ハ十三日晝、金堂幷四面廻廊、中門、南大門、八幡社、鐘籠(樓)經藏、講堂燒失了、八幡神躰取出申、御作之五大尊等少々取出、悉以秦六之所爲也、

空海作五大尊ヲ取出ス

廿一日、夜振、地

一加賀公昨日上洛、東寺事驚入之由、隨心院殿ニ令申了、

廿五日、

一就他寺探題事、當講幷竪者共巨細之書狀、昨日京上之處、馬借共清水幷三十三間ニ閉籠、德政事申之、萬一被責之者可放火云々、就此事路次難治之間罷歸了、今日又令計略京上、自東北院同書狀等上之、論義以下事同申上云々、

京都ヘノ路次難儀

一御妻書狀昨日付也、日柚留木代持來、路次難義間、西へ廻了、京燒亡、行候道ヨリ見之云々、馬借共清水三十三間閉籠條必定々々、

馬借退散

廿八日、

一祐松申、京都馬借退散了、路次無爲、明日廿九日商人上洛云々、事傳了、

〔大乘院日記目錄〕四　九月十三日、晝東寺悉以炎上了、塔相殘、是馬借共閉籠間、細川手寄來責之間放火云々、金堂幷廻廊、中門、南大門、八幡社、鐘樓、經藏、講堂分也、五重塔、灌頂堂、食堂以下相殘、本尊悉燒了、五大尊計取出、八幡神躰同、

諸堂本尊燒失ストノ說

〔政覺大僧正記〕十　八月廿六日、戊戌、

一京都德政蜂起以外也云々、

九月朔日、癸卯、雨下、

一京都德政昨日ヨリ靜謐云々、

十八日、庚申、

一加賀都維那清顯、物語云、去十三日馬借共籠東寺間、細川勢放處、火ヲ付訖、以外事也、金堂、同廊、講堂、鐘樓、經藏、八幡宮、中門、南大門悉以燒失、大師御作

政元ノ兵火ヲ東寺ニ放ツ

物共大部燒失了、愁歎中々無是非者也、

廿五日、丁卯、

一京都此一兩日馬借又蜂起云々、三十三間幷清水ニ取籠云々、

〔蔗軒日錄〕人　八月卅日、雨、○中略整子在京寺想必心及之乎、京師德政不知如何、予病中念々在茲焉、

九月十七、○中略大仙至、告曰、三五日以前京師東寺回錄之災矣、士卒軍手等細川殿攻之、卒徒死者四十餘人、細氏之軍死者十八人、終日戰、堂宇作焦土、大塔食堂不燼、吁法滅時到、不可奈何、然不知其實、

十九、晴、○中略伊豫之僧佩京書而至曰、今月十三日東寺災、四宇存矣、二樂堂火、大塔存矣云々、德政熄矣、或云、將陣于北埜云々、

廿一、陰、○中略初夜利公來談、○中略又云、近日都鄙之人皆曰、東寺之災如此、今所存之大伽藍、東福一寺而已矣、奈何々々、聞之魂銷膽破可愼之、甚者不知、東福大衆悲有此怖畏否、一日一有異愼之心、有相延之乎、

廿二、晴、○中略大仙至、話及東寺之災、

廿四、晴、○中略京町人至、話京中幷東寺之變、不可忍、

今存スルハ大伽藍東福寺ノミ

一揆ノ死者四十餘人

政元勢ノ死者十八人

廿九、雨、○中略京師土田佩陳外郎狀而至、書一揆皆散、京中少安靜云々、

〔東寺百合文書〕（冷泉書）「文明十八」○サ四十一之五十三山城

尙々、明日便宜候、此使被待候て、御卷數御狀等被認候て可給候、

先日參申候、仍明日西國へ可然便宜候、兼行名事被仰下候者可然候、今度炎上以下之儀被仰、年貢進納候者、一段可爲興隆候由、屋形同內藤方へも御卷數書狀等まて、別而御祈禱伽藍建立候由、懇被遊候て被仰候者、ちすゝ進候ハぬ事者候ましく候と存候之間、態好便候間令申候、此使御卷數（屋形、內藤）、二通御狀同可給候、則可下遣候、春者全□必々可罷上候間、其時委細可申入候、旁可參申入候、恐惶謹言、

十月十七日　守爲（花押）

（ウハ書）「仆」　大貳律師

寶嚴院御坊中　守爲

〔皇年代略記〕（後土御門院）同（文明）十八年九月十三日、東寺燒亡、土民又號德政所爲也、

〔如是院年代記〕丙午十八九月十三日、東寺炎上、德政一揆、自火自滅、

〔建仁寺年代記〕丙午十八九月十三日、東寺炎上、德政一揆、自火自滅、

〔年代記樂亭文庫本〕丙午十八九月、土一揆籠東寺、同十三日巳刻攻燒大伽藍、土一揆數不知衆殺、

〔高野春秋編年輯錄〕十一　文明十七年（八）乙巳（丙午）秋九月十三日、東寺諸堂燒失、是係惡黨放火也、告來故誌、

〔增補筒井家記〕乾筒井氏五代之傳記　一三代目明舜房法印順盛

（文明十七年）同九月十三ノ夜、（文明十八年ノ誤）、東寺ノ諸堂一揆ノ爲ニ燒タリ、順盛一千餘人ヲ卒シ馳上リ、東山殿ヲ守護セリ、

○東寺八幡宮假殿立柱上棟日時定及ビ假殿遷座ノコト、便宜左ニ合敍ス、

〔東寺百合文書〕を十一之十三（端裏書）「就死人穢之事、從吉田神主方返答折紙文明十八」○山城

當寺八幡宮假殿造立事、尤可然存候、今度死人穢事、於寺中者、以大內之准據可爲公界之通路儀候間、不可及觸穢候、就中云八幡宮、云結戒地、旁以早々被行清祓之條、殊可然候乎、

賀茂在通日次勘進

〔東寺百合文書〕と二十三（端裏書）「假殿造營日取勘進文明十八九月廿一」○山城

鎭守八幡宮假殿造營日

今月廿二日甲子　時卯

廿三日乙丑　時卯

廿五日丁卯　時辰未

九月廿一日

在通（賀茂）

立柱上棟遷座最初日次等勘進

〔東寺百合文書〕ね十三號（端裏書）「假殿立柱上棟并御遷座最初日取等勘進文明十八九廿四」○山城

鎭守八幡宮假殿立柱上棟日

今月廿七日己巳　時辰未戌

廿九日辛未　時辰未

立柱次第東西北南

雖爲土用中、於神社不苦候也、

文明十八年八月二十四日

立柱次第

東寺八幡宮假殿造立ニ就キ吉田兼倶ノ返事

遷座日

十月十六日戊子　宥凶會日　時亥

廿二日甲午　時亥　在通

九月廿四日

〔東寺百合文書〕を　十七下之十八　○山城

（端書）「御遷座日取重而勘進　文明十八九廿八」

遷座日次重ネテ勘進

鎮守八幡宮遷座日

十月七日己卯　時戌　亥

十日壬午　時　亥

九月廿六日　在通

〔實隆公記〕十　十月四日、丙子、晴、○略　中　午後詣東寺、御影拜見、御舍利頂戴、殊勝々々、其外所々歷覽、結緣不淺者也、來七日鎮守八幡假殿遷坐云々、

○東寺八幡宮造營事始ノコト、長享元年二月十一日ノ條ニ見ユ、

三條西實隆東寺參詣

幕府、近衞政家ノ請ニ依リ、同家領加賀安江保ニ、年貢未進ヲ督促ス、

〔後法興院政家記〕十一　八月廿四日、丙申、晴、家門領加州安江保事、百姓致緩怠間、申武家奉書今日到來、松岡、二俣一向衆兩人可沙汰居本所代官之由、被仰付訖、

百姓緩怠

一向衆松岡二俣ヲ本所代官ト爲ス

二十七日、己亥、幕府、叡慮ニ依リテ、一色義直ノ、禁裏御料所若狹小濱ヲ管スルヲ罷メ、武田國信ニ還付セシム、義直、之ヲ恨ミテ丹後ニ歸ル、

〔長興宿禰記〕八月廿七日、己亥、晴、○略　中　是日一色修理大夫義直、下向丹後國、予昨日爲暇請罷向面談了、近日細々出向、令知音故也、昨日出仕被申御暇之由被示、若狹國小濱知行之儀、先度年一兩前被成御判之處、近日彼小濱禁裏御料所也、如元於武田大膳大夫入道在國也、可申付之由、爲叡慮被仰出之由、有其沙汰、於武田亦被下御判之間、匠作失面目之由述懷、下向之由風聞、京都大名無人、細川京兆外無人、各在州不可然之由、有其沙汰、

〔後法興院政家記〕十一　八月廿八日、庚子、晴陰、晚景雨一滴洒、○略　中　一色修理大夫在國、丹後、今朝下向云々、若州小濱事、自禁裏被執仰武家間、被返付武田云々、依此事述懷下國云々、

〔大乘院寺社雜事記〕百四　九月三日、

一惠林寺殿御入、○略　中　八月廿七日　同日一色在國云々、

〔政覺大僧正記〕十　九月三日、乙巳、

一去月廿六日、一色在國了、

〔年代記天寧寺本〕○丹波　丙午、一色義直丹後下國、

義政、室日野氏ヲ小河第ニ訪ヒ、猿樂ヲ觀ル、

〔後法興院政家記〕十一　八月廿七日、己亥、晴、御臺御方江被申東山殿云々、

義政歸第

〔親長卿記〕十七　八月廿七日、晴、○略中今日東山殿渡御御臺御方云々、

廿九日、丑、陰、時々小雨下、東山殿昨夕御歸宅云々、

廿九日、雨下、今日東山殿還御東山殿云々、

〔實隆公記〕十　八月廿七日、己亥、晴、○略中今日東山殿渡御室町殿云々、

〔長興宿禰記〕八月廿七日、己亥、晴、今日東山殿准后、渡御御臺御第、一位殿、御招請

華美ノ酒宴

義尙參會

御一獻、頗被營華美御酒宴、有猿樂、右大將義尙殿御參會、今夜御逗留、可有兩三日

御坐云々、御賜物種々被進由、有其沙汰、

〔大乘院寺社雜事記〕百四　九月三日、

一惠林寺殿御入、○略中廿七日、於御臺猿樂在之、東山殿、公方御成、法花寺殿御

見物、夜ニ入了、

是月、醍醐寺三寶院、山城小野莊、四宮散在ニツキ、山科言國ト爭論シ、之ヲ幕府ニ訴フ、

〔理性院文書〕○坤山城

三ゐうゐんをんせきさつしやう申、山しなおおのゝ庄、四の宮ちんさいとうの事

右山しなおそうかう地とうしきの事、くゐんおう年中より、代々此御判をゐいせられ、いまに御知行云々、同しくおのゝ庄ゑやうかうとうの事、ぬくゐうゐん殿様の御代御せいたひをなされ、正ちやうくゐんをんよりそう御代いまにいさり候て、御知行ちゐひなき事ふ候、此ゑやうかうのゐいり候事□□（ハカ）（ミカ）井寺此上くゐうゐうゐんよりはさハり、大きやうろ手よりをんせきへ御たいゑやう此所よ、山しな家知行をいさし、そくまをんせきへゐうゑやうのよし申かをめられ候、上爲（ゑ）として御たいゑやうのうへハ、ゐうゑやうのよし申され候くせ事まて候、此ゐん先御代御ささを經られ候て進せられ候、子細御教書う見え候、此よしきこしめし入られ、御せいたひかしこまり存へく候、仍言上如件、

文明十八年八月日

○足利尊氏、三寶院賢俊ヲ山科莊地頭職ニ補スルコト、觀應二年正月二十八日ノ條ニ、山科莊ヲ安堵セシムルコト、同年二月一日ノ條ニ、同莊半分ヲ地頭得分トシテ沙汰セシムルコト、同年十月二十五日ノ條ニ、重ネテ安堵セシムルコト、文和元年十月二十四日ノ條ニ、幕府、三寶院ト山科家トノ爭論ヲ裁シ、三寶院ニ小野莊ヲ安堵セシムルコト、明應四年七月二十八日ノ條ニ見ユ、

義政、景三（横川）ヲ相國寺崇壽院住持ト爲ス、

〔蔭涼軒日錄〕文明十七年十月廿八日、齋罷謁東府、（○中略）崇壽（景文）院來年夏了可有退、後住事以横川（景三）和尚被定之、蓋御相伴衆被擇人才也、乃以樹公傳台命於小補軒（并鹿苑院、○中略）晚來小補和尚爲禮謝來于當軒、有宴、

廿九日、（○中略）遂往東府、就崇壽院後住事、横川和尚昨晚來曰、住持職事、雖爲何在所無其望、安閑自由之趣甘之、雖然相公尊命誠難辭、可應台命之由、被白之旨白之、（○本書十八年八月ノ記事闕ク、）

十九年七月廿三日、不參、天快晴、（○中略、義政、鹿苑院ノ逆修會ニ臨ムコトニカヽル、長享元年二月七日ノ條ニ收ム、）自袖中取出崇壽院横川一行、謹白、横川崇壽住院、自去年八月早及一回、條々不便之子細有之、先有御免而又相應之在所事被仰付者、可忝畏入之由白之、

○景三、崇壽院ヲ退クコト、長享元年七月二十八日ノ條ニ見ユ、

景三住持ニ望ミ義政ヲ何ヲ依リ持ズモノ應ズ之命

景文退院後住ヲ景三持ヲ住ト定ム

昭和十一年三月六日印刷
昭和十一年五月二十日發行

（大日本史料第八編之十八奥付）
豫約價金七圓

編纂兼發行者　東京帝國大學

印刷者　三秀舍　島連太郎
東京市神田區美土代町十六番地

發行所　東京帝國大學文學部　史料編纂所
電話小石川（85）七〇二二番　四〇一二番

著作權所有

寄贈
2026
貴族院
昭和
11.8.21
圖書係
2106